



いとう

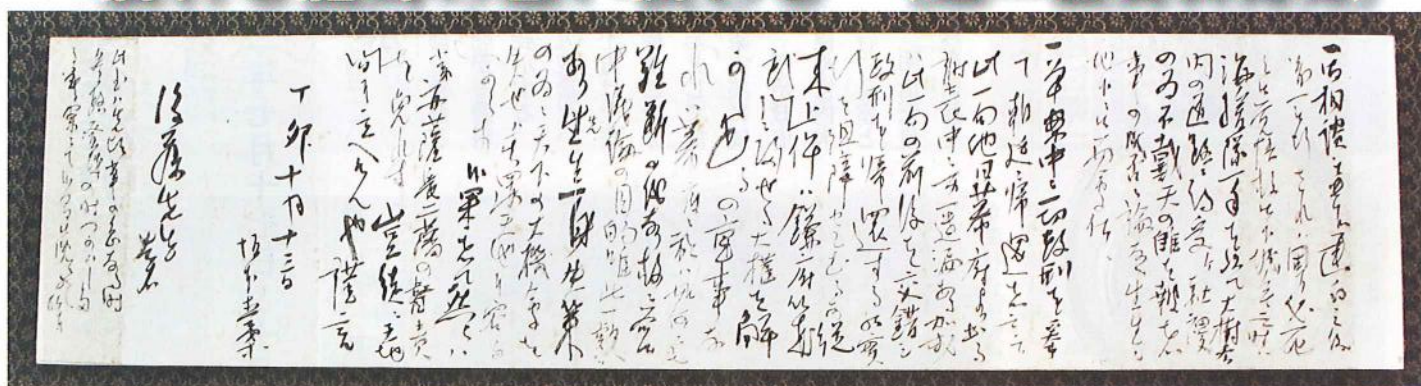


海援隊旗(二色きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

熟慮 JUKURYO DANKOU 断行

“揺れる龍馬の思い伝わる”(超一級資料発見)



後藤象二郎宛直筆の草案全体(真物)



後藤象二郎宛書簡(複製)

えられ、精巧なものだった。原本が発見されていない現段階では、大変貴重な資料である。筆の勢いなどから、大政奉還にける龍馬の熱い思いが伝わってくる。写真二点の資料は七月一七日からの企画展で初公開する。

最後になりましたが、貴重な資料をこれまで大切に保存してこられた皆様と、情報を寄せてくださった方や報道各社の皆様にお礼を申し上げます。

8月空前の人出に！ 真価問われる記念館

「龍馬伝」効果が予想以上に入館者数に表れている。

この1年間で塗り替えた記録はまず、1日6,686人(5月2日1ヶ月49,004人)13月 年間246,987人(平成21年4月から同22年3月まで)。しかも軽々である。それに伴って「入館時間待ち」など、館としての初体験の場面も珍しくなくなった。突然の大雨というのもあった。事務所の壁に雨筋が書かれた。地下展示室に続く階段沿いに5個の雑巾入りバケツが登場した。館内は全部だと20個である。これらの数字がこのままでなくさらに先が読めないところ今年に異常さがある。

8月は夏休み。よさこい祭り、お盆と続く。一年で一番入館者の多い時期だ。現在の入館者ペースは昨年の3倍増し。それから予想すると8月は6万人を超えるだろう。まだまだこれから記録ラッシュが待っている。記念館の真価が問われることにもなる。

(森 健志郎)

龍馬から後藤象二郎に宛てた慶応三年(一八六七)一〇月一三日の手紙の複製や直筆の草案が相次いで見つかった。大政奉還直前のもので、これまで見つかった龍馬の手紙の中でも最高級に重要な手紙である。

一連の資料発見の経緯は、六月一〇日に高知新聞で報道されたことがきっかけだった。高知市内の民家で、伝わっている寸法より少し小さめの複製が見つかった。さらに報道をご覧になった県内の方から、「同じような手紙がある」と情報を頂いた。これが紛れもなく龍馬直筆の手紙だった。しかも手紙の最後には、草案であることが書き添えられていた。職員一同、震えがくるほど感動したのは言うまでもない。さらにこの草案についてのNHKのニュースをご覧になった大阪市の方から「私の所にも」という情報が舞い込んだ。原本の複製ではあったが、寸法はほぼ同じと考

『薩長同盟を陰で支えた男たち』展

—舞台裏に迫る—

平成二十二年七月十七日～十月八日

薩長同盟という発想は、文久三年（一八六三）八月十八日の政変で都を追われた公卿ら（七郷のち五卿）を中心に生まれたものである。この公卿の中に土佐藩の山内家と深い関わりのある三条実美がいた。そのため、藩命によって土方久元ら土佐藩士たちが衛士を務めていた。土方は七郷落ちの際、藩の帰国命令を無視してまで三条らの警護を務めた。

そして、三条らが太宰府に移された後に、太宰府のある筑前藩の藩士らと協力して薩長同盟を画策し始めた。しかし、筑前藩で内紛が起こり、薩長同盟は土方や中岡慎太郎ら土佐脱藩志士に託されることとなった。時は第二次幕長戦争に向かっている中、いよいよ薩長の同盟が必要となり、龍馬が協力し、成功に導いていったのだ。土方らの事前の根回しがなければ、龍馬がいかに薩長から信頼されていたとしても、同盟は成功しなかっただろう。

珍しい時計展示

まず、土方久元の御子孫などから土方の人物像が分かる資料をいくつかお借りし展示する。中でも御子孫から大変珍しい時計をお借りする。土方は土佐藩の下士に含まれる武士の身分に生まれ、五卿の衛士として活躍した。維新後も三条実美に随行して東京に出た後、明治政府に出仕し、農商務大臣や宮内大臣などを歴任した。特に皇室とのつながりが深く、明治天皇や大正天皇から絶大な信頼を



懐中時計

得ていた。時計は、大正七年（一九一八）、大正天皇がイギリ



土方久元

スの最高勲章であるガーター勲章を受章する際に、ジョージ五世の代理として来日したコンノート公から頂いたものと考えられる。箱に「MYSTERIOUS（ミステリアス）」と記されており、文字盤が透けており後ろが見えるようになっている。

は病死、沢宣嘉は生野の変を起す（の筑前へ引き渡す情報など、五卿を巡る動向を記したものの。それから、筑前で五卿の引き取りを担当し、薩長同盟に尽力していた筑前藩士・月形洗蔵らが弾圧された乙丑の獄の処罰者名簿。第二次幕長戦争の戦況を記した文書など。土佐藩の十六代藩主山内豊範は長州藩から妻を娶っていたので、幕長戦争に関わる動向には特に気を配っていたものと思われる。

薩長同盟は幕府の第二次幕長戦争から長州藩を救うことが目の前の課題であった。そのため、薩長同盟で、木戸孝允が六ヶ条にまとめたものには、長州藩が勝ちそうな場合、負けそうな場合など、様々な想定がなされている。

その薩長同盟直後に伏見寺田屋で龍馬が襲われた時、伏見奉行所が京都所司代に提出した報告書も展示する。これまでこの事件については、龍馬と三吉慎蔵の記録しか無かったが、初めて襲った幕府側の資料が出てきたのだ。昨年末に話題となった資料を本展で初めて展示する。

三浦 夏樹

好評 『龍馬』と『啄木』展

無謀一転『面白い』の感想

七月十六日まで

近江屋対談「知事対談」

【六月二十八日】

ある日、啄木の歌にじっと入っている男性がいた。ツアー客らしいその人は「大阪から来ました。若い頃から啄木が好きだったので」と懐かしそうに啄木の歌をいくつか暗唱された。またある日、「混沌の今、私たちは私心がない龍馬とほど遠い生き方をしゅう。龍馬と啄木は、中江兆民やその長男・丑吉の生き方を思い出す。面白い企画やと思う。がんばってほしい」と激励の電話をいただいた。

「無謀だ」と言われた龍馬と啄木のコラボは、それぞれの「明日の風景」を提示する場になったと思う。開催初日には石川啄木記念館学芸員・山本玲子さんをゲストに近江屋対談を開催。啄木と付き合って二十二年。「生きる上で啄木に学ぶことは多い」という山本さんの言葉は、そのままだ龍馬にも当てはまるようだ。おかげさまで企画展の入館者は十一万人を超えた。終盤、お見逃しなく。

企画展関連行事の目玉は、達増拓也・岩手県知事（46）と尾崎正直・高知県知事（42）のビッグ対談。両知事は、龍馬の海援隊ならぬ、高知（Kochi）と岩手（Iwate）の頭文字をとった「K・Iカイ」援隊」を結成し、両県の交流を図っていくこととしている。ともに「龍馬ファン」だという若い知事の対談に会場は大いに沸いた。

「近江屋対談」の会場は記念館隣の国民宿舎「桂浜荘」。集まった人たちは定員超えの百人余り、岩手県からの高知交流団三十人も参加して盛りあがった。

目指す！「新しい公共」
「達増知事」

岩手と高知のつながりは、啄木の父・一楨が高知で亡くなったということだけでなく、岩



意気投合して対談する達増知事（右）と尾崎知事

手・小岩井農場の創設者の一人に岩崎弥太郎の弟・弥之助や小野義真など高知出身の人がいます。「龍馬伝」の監督、大友啓史さんは盛岡出身という縁もあります。

私が一番好きな啄木の歌は、「不來方のお城の草に寝ころびて空に吸われし 十五の心」という素朴な短歌です。啄木は歌人ですが、明治期の帝国主義を批判し近代国家のあり方に警鐘を鳴らす文章も残しています。二十七歳という若さで死ななければ、龍馬のように日本の行方を

を修正していたかもしれません。岩手県庁では今、龍馬の海援隊を做って、「I（アイ）援隊」運動を展開しています。Iは岩手の頭文字I、愛するI、私のIです。県民が力を合わせて地域をつくり、その中心を県が担う。旧弊を打ち破り、県の職員が民間、県民、地域とつながって「新しい公共」をつくろうとしています。

地方分権超え、地方分散で魅力アップ

「尾崎知事」

私は子どものころから龍馬が好きでした。龍馬は身分を超えて各人が尊重される社会をめざし、旧弊を打ち壊した後の時代のことも考えた政治家です。人間味あふれるところなど啄木とも共通していますね。

今の時代は、現在の生活を守りつつ新しい時代をつくりあげることが求められています。そのためには中央集権ではなく、地

「一段高いレベルの地方改革」を！

幕末は地方の力が強く、地方人たちが力を合わせて新しい日本をつくった。今こそ、船中八策の原点に返って、地方を強くしていくことが両知事は時間いっぱい熱く語った。最後に、尾崎知事が「今度は私が岩手を訪ねて知事対談をしましょう」と締めくくると、会場は大きな拍手に包まれた。前田 由紀枝

「鐔は知っている!」②

土佐の幕末維新

土佐歴史資料研究会 現代龍馬学会

小島 一男

前回までのあらすじ

慶応元年(1865)土佐勤王党への弾圧が激しくなったところ。土佐藩の鐔師、土佐明珍家4代紀宗義は名工の名をほしいままにしている。その宗義をして鐔師として、私の原点、と言わしめたのが、上士で鐔の目利きでは実力者の中西武五郎であった。話は武五郎の若かりし頃にまでさかのぼる。場面は道具屋「観山堂」……

武五郎の予感

「観山堂」で武五郎と主人が鐔の話をしてる所へ、身なりのいい武士が入ってきた。習性になっていた。武五郎の視線は、見るとはなしにその武士の腰間にそそがれ、そして、ハッと息を呑んだ。木瓜形の鐔に何か小透かしが見え、毛彫りが施されている。ピンときた。(信家だ……それも上手の信家だ……)

武五郎は主人と武士の話からその武士が、鍛冶橋狩野本家7代探信に家宝である探幽の桜の箱書きを依頼しての帰宅途中で、自分も鐔好きであることから、立ち寄ったのだという。「たいそう立派な信家でございますね。これは珍しい。桜でございますか?」と、話を鐔に向けた。

「いやあ、お恥かしい!拙者は信家がお好きで少々集めており申す」と愛おしそうに鐔を撫でた。そこまで聞いて

た主人は、武五郎を振り返った「こちらの御武家様も……」

言いかけたところを武五郎が立ち上がり一礼して身分と名前を名乗った。くだんの武士も頭をさげ

「旗本、中村寛太夫と申す」

丁寧な挨拶であった。

寛太夫が帰った後、武五郎は主人から色々話を聞いた。寛太夫とは主人も初対面なのだという。

「お会いするのは初めてです。しかし、中村様と言えば、道具屋仲間では、信家の収集家として有名ですよ。江戸一番、右にでる者はないそうでございます」

武五郎はその日はそれで「観山堂」を出たが、なぜか他の店に行く気にもならず、結局、藩邸に帰った。

やがて主人豊資公が帰郷した。武五郎は進み出て頭を下げた。

すると、豊資公は

「おう、武五郎か、何かよい鐔でも手に入れたのか」

上機嫌で声をかけた。

武五郎は「観山堂」での中村寛太夫との出会いの一件を、興奮気味に話した。抑えようにも抑えきれない、そんな様子である。

「フーン、そんなに良い信家だったのか」

豊資公は武五郎の顔をまじまじと見つめながら言った。

「はい」

「そちは、その鐔が欲しいのか?」

「はい、殿様。殿のご尊顔を拝するまで、この武五郎あの鐔が頭から放れずほっとして何も考えることができませんでした。しかしながら、商人の持ち物ならばともかく身分ある旗本で、しかも鐔の収集家であるお方の持ち物です。なんともどうしようありません」

武五郎のその様子を見ながら、少し考えていた豊資が何か心に決断したように武五郎に言った。

「よし、武五郎。当たって砕けるという諺もある。そちは余の名代としてその一番の信家を申し受けてまいれ。叶えばその鐔、我が山内家の家宝といったそうぞ。わが嫡子豊昭と時子姫の祝儀の記念にもなるさのう、武五郎、ハハハ」

豊資は笑ってうまそうに酒を口に運んだ。

武五郎はうれしい半面、これは大変なことになったと身震いが起きた。

土佐の鐔家

殿様から、うれし難い宿題を仰せつかった武五郎である。事前にかの中村寛太夫に連絡をとった武五郎は、大安の日を選んで中間一人を連れ根岸の寛太夫

だ格調高く咲き、気品に満ちた五弁の花びらをこちらに見せている。

探幽の桜だ!探幽の桜だ!何んとした事か武五郎は緊張のあまり、床の間の掛け軸を拝見する余裕さえも失っていたのである。胸のうちにこみ上げてくるものを感じていた。

「つまりこうだ。中村殿は私の来訪を知るや家宝の「探幽の桜」を床に掛け、最高の礼を持って迎えてくれたわけだ。なんとという御人。うらやましい武士とはまさに彼のことをいうのだろう」

武五郎は目を潤ませ、桜と寛太夫に胸の中で厚く礼を述べた。すると、不思議に平静に戻っていく自分を自覚することができた。

「そうだ、桜だ。先日、中村殿が刀に掛けていた木瓜鐔はどうだろう?。あの時中村殿は狩野本家に探幽の桜の箱書きを依頼しての帰りだと言っていた、幕府の奥絵師であり格式高い狩野本家に向う際の差料に掛けたもの、悪からうはずがなく、一品に違いない。ひとつあれを所望してみよう」

ここまで考えた時、武五郎は自信を持った目で寛太夫を見た。寛太夫はそれ

「はっ!」

と息をのんだ。

そこには、一目で「狩野派」と観える見事な桜が、控えめ

「ご無礼の段、平にお許し下され」
深々と頭を下げた。
「いや、中西殿、そのように信家がお好きとは心強い。拙者もいたって好きでございます。それほどの物でもござらぬが、少々持っておりますればどうぞ」
寛太夫は用人を呼び、鐔をもってこさせた。それは見事な細工の鐔箆箆におさまっており、主人の鐔に対する愛着がう



(画) 和田 通博

に広がる。

「いかがですか、中西殿。いずれなりとも結構でございます。御遠慮なく、ひと品土州公に献じましょう」

「かたじけなくござる」

武五郎は静かに言った。

「しからばお言葉に甘えて申します。先日、貴殿が鍛冶橋狩野本家に出向かれた時、お刀に掛けられていた木瓜形の信家を、いかがでございますか?」

「いやあ、まいった。中西殿、貴殿はなかなかお目が高い」

寛太夫は大きな声で笑って席を立った。

寛太夫は武五郎に一枚の鐔を手渡した。

「これは拙者秘蔵中第一の鐔でございます。しかし御所望とあれば是非もなし。気持ちよく進呈いたそう」

「ありがたき幸せに存する」

武五郎はその潔さに感激しなみだがにじむのを禁じ得なかった。改めて掌中の鐔を見るに、なるほど鐔形は桜とも見え

る変わり木瓜形で信家の鐔としては他に例を見ない珍品である。角耳、小肉、鋤残し耳、櫃穴は瓢箪形に透かし、右肩に斧を小透し、地一面に薄く唐草を毛彫り

参考

山内豊昭(13代)は、西洋流砲術家高島秋帆に家臣、徳弘孝威(重吉)入門させ、土佐藩への西洋流砲術の導入に尽力し、豊信(容堂)にそれを引き継がせた。また、豊昭の室は松平豊後守

斉興の二女(時子姫)で、後に徳川家定(十三代)の室となる篤姫の義父である島津斉彬(二十八代)の妹である。

西国の大藩島津家より嫁して来た時子姫を土佐人は大いに喜び

「土佐はよくに、南をうけて、薩摩おろしがそよそよ」と「よきこい節」に歌われたが、豊昭は34歳で早逝し、

豊資を落胆させた。



拜啓 龍馬 殿

000通

3月21日～5月24日



りょうまでんをみていない人はみてください。りょうまの9じからやります。りょうまがかつこよくてすてきです。ぜひみてください。

(3月21日 大阪 K.H 7歳 女子)



坂本龍馬さんはテレビでよく見えています。龍馬さんは頭のチリチリやけんの使い方がすごかったです。ぼくは坂本龍馬にいかいでもいいから会ってみたい。大阪市の鶴見区から坂本龍馬のために来ました。坂本龍馬にけんの使い方を教えてもらいたいです。坂本龍馬はかっこいいぜよ！

(3月21日 大阪 Y.H 11歳 男子)



歴史上の人物で一番会ってみたい人は坂本龍馬です。行動派で明るく、強い龍馬が大好きです。坂本龍馬記念館に来ることができて本当に嬉しいです。短い人生でしたが、龍馬が残したものはとても大きいです。これからずっとずっとファンです。

(3月21日 大阪 T.H 35歳 女性)



私が初めてあなたを知ったのは小学生の頃、すごいスーパースターがいたんだ、と思った気持ちは今も変わりません。今回、初めて高知にきました。遠かったよ。遠かった。鹿児島育ちの私にとっては、霧島に行きまじいをはせるか、長崎にも行きまじが：くらいだったんですが、ようやく土佐へ。しかも一人旅です。高知市内を巡り、桂浜に来て、龍馬さんが見た景色を見て、長年の夢がようやく叶いました。いろいろ見てまわりましたが、やっぱりあなたはスーパースターだと思います。日本人にこんなにも愛される偉人がいるでしょうか(また、人の多いこと多いこと。どこに行ってもどこにいても)。いくつになっても人間ちっさい私ですが、龍馬さんくらい大きな志を持って強く生きたいです。あなたの年齢を超えるまであと数年。偉業をとげるとまでは言いませんが、せめてかかげた夢くらいは叶えたいと思います。それでは、また土佐を訪れたいと思います。次は一人旅じゃなくて誰かとゆっく

り。

(3月21日 J.M 26歳 女性)



桂浜に来たのは中3の時です。父が龍馬好きで、二つ上の姉と「行って来い」と言われて来たのが初めて。今日はその姉夫婦と私の三人で来ました。私の主人は龍馬男という、龍馬さんと同じ字が入っています。今度来るときは主人と来たいと思います。一泊二日の旅も今日で最終。あと少しの時間、高知を楽しんで大阪に帰ります。

(3月21日 J.M 46歳 女性)



38年前、新婚旅行でここ桂浜に立ちました。娘二人それぞれ嫁ぎ、又二人の暮らしになって、ここに帰ってきました。熱い情熱の龍馬様、今の平成の日本に戻って、日本をシャンとしていただきたいです。龍馬さんにあこがれ、62歳の今を元気に生きています。

(3月22日 大阪 H.M 62歳 男性)



り。

ここは館長の部屋

森 健志郎

不快な電話

5月最後の土曜日であった。県西部のK町教育委員会主催の「母の日の集い及び研修会」に龍馬をしやべれと講師に呼ばれてお邪魔した。大勢のお母さんたちとお会いして、楽しい1時間30分を過ごした。久々の幡多路にくつろいだものである。一夜明けて月曜日の午前中、卓上の電話が鳴った。とするとK町の教育委員会次長さんという。てっきり先日の講演お礼の挨拶だと思って「どうもどうも」などとお礼していたら妙に話が合わない。お礼電話ではなく、抗議、口調に戸惑ってしまった。顚末はこうだ。

先の講演の際、講演時間残り10分に気がついて私は、日ごろから気になっていた地元小学生T君のことが頭をよぎった。T君は3年生の時、校内で同級生の悪ふざけが原因で階段から落ちて頭部を打ち、強度の鞭打ち症に悩まされることになった。それから2年以上が過ぎて今年6年生。しかし治療は続いている。病状は当時よりむしろ悪化した。過食症が加わった。精神的ストレスが原因だと主治医は判断している。ストレスを取り除くように医師は大人社会に呼びかけた。ところが、あだこうだと埒があかない。2年が過ぎた。医師は県教育長にまで嘆願書を出した。

私はこの問題は地域の問題として、地域の人たちが個々の問題として地域みんなで考えるべきだと常日頃思ってきた。過食症のT君が真つ暗の台所で、炊飯器を抱えて白米をほおばっている。それも泣きながら。たまりません。この話を、地域で考えよう、考えてください」と話した。

それに対する電話が「講演内容と趣旨がずれているので、抗議する!」というのである。驚きというより開いた口がふさがらないとはこのこと。さらにおかしいのは「私は講演を聞いていませんが」との前置きである。誰かに言われてのことだとは想像がついた。告げ口した者の姿を想像した。同時にカビの生えたあまりにも時代的な「行政システム」にため息であった。

森 健志郎



これがこへの二度目の訪問です。すいぶんとごさたしました。学生時分は桂浜で何度も語り合いましたね。本当に大切な思い出です。ありがとう。今山形に戻り、今年で十年目です。本気で土佐に戻りたいと考えていますが、仕事、そして両親のことがあり悩んでいます。ここに来る理由はないのですが、自分の居場所があるのはやはりここ土佐かと思っています。お知恵を...とは言いません。いつもどおり聞いてもらえただけで...では、また。

(3月23日 山形 T.F 33歳 男性)



ぼくは今泣き虫なんだけど、大きくなったら太平洋みたいな大きいゆめをいつか持ちたい。りょうまみたいな人になつてやる。ぼくも土佐の男だ。やたらうまいいな頭のいい人もいいなあ。お母さんも応援してるよ!お父さんも見守ってるよ!

(4月2日 高知 K.S 9歳 男子)



こんにちは。私も龍馬さんと同じ誕生日!しかも龍馬さんが生まれた所から数百メートルの桜馬場で生まれたよ!勝手に親近感を持つてずっと生きてきました。今年も龍馬さんのことをみんなが注目しているからとそううれい!また来ますね。

(3月27日 大阪 K.Y 40歳 男性)



今年高校に入学する者です。ボクは人付き合いが苦手、人の気持ちをろくに考えないで、うわべだけのような感じ。今、回四国に一人旅をして、この龍馬記念館を訪れて、龍馬さんは人間が好きで、人と人との関係を大切にしているのやうなことをやり通していたのだなと思ひ感動しました。僕も高校に入ったら友達と本気で付き合せて、友達の気持ちをよく考えて、自身を持って、やると決めたことはやりとげようと思ひます。死ぬ気で頑張りますよ、龍馬さん、見とてくれ。

(3月29日 横浜 K.W 15歳 男子)



長崎の亀山社中、京都の霊山護国神社内にあるお墓に訪れたことがあります。でも生れ育った高知は一度も行ったことがなく、初めて訪れました。高知から長崎を見てみたら、何とも遠く、電車と夜行バスを乗り継いで11時間かかりました。高知も長崎以上に龍馬伝ブームで盛り上がっていて、「本場の聖地」にきたよ!に感激しました。でも遠いんですね。あなたの行動力には恐れ入ります。長崎県全体が龍馬がぶれ(笑) になつてしまつていて、高知に行つて、初めて本物の龍馬に出会えた、そんな気がします。これから龍馬伝で長崎が出てきます

編集者より

いやあ〜「大河ドラマ効果」スゴイですね!話には聞いておりましたが想像をはるかにこえていました。入館者数は数倍に増え、平日がこれまでの休日並み、休日はこれまでのGWやお盆のようです。これまでの一日入館者数の最高は平成5年のGWに記録した3,594人でしたが、今年のGWに一気に倍近くの6,686人を記録、開館以来初の入場制限を行いました。入館者の皆さんから龍馬への手紙も投函箱から溢れんばかり。手紙好きの龍馬も喜んでることでしょう。

ジュニア・カルチャーサポーター出動!

今年度から土佐中・高等学校の中学生と高校生10人が当館ボランティア「ジュニア・カルチャーサポーター」として活動を始めました。10人は英語クラブの部員でやる気満々。さっそく記念館の「案内図録」や子ども用龍馬の紹介文の英訳をしています。クラブ顧問の小林先生、副顧問のトム先生やアンドリュース先生と一緒にがんばっています。5月の連休には記念館に来てゴミ拾いや館内の案内もしました。ゴミ拾いも「楽しかった」と喜ぶ力強い中学生です。

「ありがとう」が励みに

土佐高校2年 岡 覚子(おか・さとこ)

私は、龍馬記念館で地下二階でボランティアをGW中に二日間しました。想像以上の人の多さに圧倒され、本当にここは、高知県か?と思ってしまう。主なボランティアの内容は、入場者の誘導でした。最初は、恥ずかしくて誘導する時に小さい声でしか誘導出来ませんでした。けれどもやってくるうちに慣れてきてちゃんと誘導することができました。また、誘導をしていると「あれはどこ?」とか「これはどこにあるの?」といった質問を受けました。その時は、上手く答えることが出来なくて自分が勉強不足なのを知りました。しかし、違う階へ行かれる入場者の方に「ありがとう」と言われたり会釈されたりすると、とても嬉しかったです。

私はボランティアの楽しさを知り、普通では出来ないことを体験出来て、ためになると思いました。夏休みなど学校が長期休暇になったらまた、行きたいと思っています。

ゴミ拾いだけでなく

土佐高校1年 宜保 然樹(ぎば・ねんじゅ)

「これ、難しいけどできるかな?」恥ずかしそうに笑いながら女の子はしばらくして「できた」と龍馬やお龍の絵の描かれたバズルを私に見せに来た。「この子、龍馬の写真を覚えて、これ誰?って聞くと、テレビの人っていうんですよ。」と横に座る女の子のお母さんが可笑しそうに話してくれた。間違っていないですね。そうだね。とお母さんと一緒に笑った。

初めてのボランティア体験はゴミを拾うだけではなく、こんな楽しい時間も過ごせた。私の好きな高知をいろんな人にちよつとでも多く楽しんでもらいたい。そんな思いで今日お手伝いさせてもらったけど喜んでもらえただろうか。

■出張・近江屋対談「平井加尾の愛した庭で」(5月13日)

明治時代に平井加尾が住んでいた家屋敷が高知市神田にある。家は当時のものではないが、その庭は当時のままだという。知る人ぞ知る県下でも有数の名園である。しかし、そこで加尾が暮らしていたことを知る人は少ないと思う。もちろん私もその一人だった。

龍馬の初恋の人といわれる加尾は、勤王の志士たちを陰で支え、兄・収二郎亡き後の平井家、夫の西山家を守り抜いた。しかし、思いを寄せる龍馬とは時代のうねりの中ではぐれてしまったような感がある。

このたび、当主・小川雅弘さんのご好意により、“加尾の愛した庭”を眺めながら近江屋対談を行った。ゲストは小川さんと吉岡郷継さん。吉岡さんは放送局勤務時代、取材を通じて加尾の孫西山綾子さんやひ孫の澄子



先日行われた出張近江屋対談の風景
＝高知市神田、小川邸で

さんと交流しており、生前の綾子さんをここに案内した。当時県外にいた綾子さんは、幼い頃この家にいた記憶と全く変わらない庭に感動し、子どものようにはいしゃいでいたという。

家屋敷は加尾の夫・西山志澄(土佐勤王党员、土陽新聞社長や衆議院議員を経て警視總監)が手に入れた。志澄はここを手放すときに「庭園を壊してはいけない」という条件をつけたほど、この庭を大切に守ったそうだ。そんな話を小川さんや吉岡さんから語っていただいた。

周辺は山桜の名所で、龍馬が脱藩のときに見たものだと伝わっている。幽玄の趣のある四百坪の庭園に、同好会の方による一絃琴が響いた。その音色に應えるようにウグイスが大きく鳴いたとき、幕末からの風を感じたのは私だけだろうか。

前田 由紀枝

■「書家 福原云外」展 ―龍馬に寄せて― を終えて “余白の美”を学ぶ

私が“海に見える・ぎやらしい”を担当するようになって、故人の個展を開催するのは福原さんが初めてである。いつもなら作家ご本人にお会いして、話を伺い作品への思いを更に深めてゆく。今回目に留まった作品は「無位真人」。細い筆致ながら無限の広がりや自由さを感じた。「地位など気にせず心のままに生きてゆく人物という意味で、龍馬に重なるところがあるでしょう」そう話したのは、云外書展示室主宰・雲の会事務局長の中澤仁さん。なるほどと納得した。また、高知短期大学の仮谷仁名誉教授からは“余白の美”がいかに大切かを教えていただいた。確かに福原さんの作品は文字と余白のバランスが非常に美しいと思う。

或る演出家の舞台を思い出した。役者が立っている所とない所の舞台空間の美しさが、偶然ではなく計算された“何もない空間の美しさ”を表現していたことを。通じるものがあつた。

中村 昌代



福原云外作「無位真人」

入館状況

2010年6月20日現在(開館以来6,748日)

◆総入館者数 2,629,572人

◆最多入館(2010年5月2日) 6,686人

◆最少入館
(2004年10月20日、台風のため) 8人

編集後記

気がつけばもう今年も半分が過ぎた。「龍馬伝旋風」は“もっともっと”と後半に向けて馬力がかかってきた。逆に職員スタッフも少々ばて気味。そんな中での飛騰74号である。今回から現代龍馬学会のページを4ページに増やす。それに来年は開館20周年の節目だから休む暇はない。目先の夏休み、お盆のシーズンの企画は「薩長同盟を陰で支えた男たち」展。歴史民俗資料館で夏場開かれる「龍馬伝」関連の「巡回展」のバックアップの役割を果たさねばならない。あれやこれや思いを詰め込んだ号になった。(モ)

館だより“飛騰”第74号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

発行日 2010(平成22)年7月1日

発行 高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015

http://www.ryoma-kinenkan.jp

「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般500円・高校生以下無料

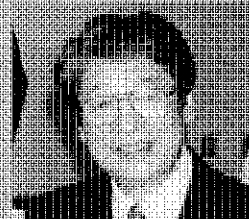
身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・
戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください

高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

龍馬が目指した北海道 ～その思想を探る～



ノンフィクション作家
合田 一朗

坂本直行さんとの出会い

北海道に住んでいて長く心に引っ掛かっていたのが、坂本龍馬の自家筋の子孫が土佐から北海道に移住していたという事実である。あれは昭和39年春、新聞社に勤務していて、広尾という町に転勤した直後、案内されて坂本直行さん宅を訪れた。

直行さんは北海道大学農学部を卒業後、広尾の荒野に入植し、開墾に勤しんだが、収益が思うように上がらず、10年間で膨大な借金を抱え、ついに農業を断念、町に出て絵を描いていた。

直行さんは初対面の私に「わが家にはこんなものがある」と言って見せてくれたのが、龍馬の15回忌に勝海舟が龍馬家を継いだ高松太郎改め坂本直宛てに贈った書だった。この時、初めて直行さんが龍馬の血縁であることを知った。

書の写真を撮影していると、直行さんが「写真を撮るのはいいが、新聞には書かないように」とあの特徴のあるぎょろっとした目を向けて言った。丁重な物言いだがかどこか威厳があって、思わず、はい、と答えてしまった。

後に直行さんが、龍馬の血筋と言われるのをことのほか嫌っていたのを知った。龍馬は凄い人物としながらも、しかし俺は俺だ、という信念がそうした態度を貫いたのであろう。土佐には「いごっそう」という言葉があるが、直行さんはまさにそれ、と感嘆した。

龍馬の便りを見る「決意」

北海道龍馬会が設立されて6年目の平成16年春の理事会で、気になっていたことを口にした。直行さんとの遠い日の約束、そして龍馬がなぜ北海道を目指そうとしたのか。そんな内容の本を書きたいと。理事たちは一瞬、驚きの表情を見せた。龍馬が蝦夷地を目指そうとしていた話など、そのころはまだ誰も知らなかった。こうして執筆はスタートした。

龍馬の便りの中に、蝦夷地に触れるものが何通か残っていた。心を震わせたのが次の一通である。慶応3年3月6日、下関の伊藤助太夫方に寄留していた龍馬が長府藩士印藤肇に宛てたものである。

小弟ハエゾに渡らんとせし頃より、新国を開き候ハ積年の思ひ一世の思ひ出ニ候間、何卒一人でなりともやり付申しべくと存居候。助太夫事別ニ小弟の志を憐ミ、且積年の思ひも存之、不屈して竊ニ志を振ひ居申候。

便りはこの後、助太夫の協力で大洲藩から「いろは丸」を借りたことを述べ、蝦夷地行きにも触れている。

龍馬が二度目の脱藩を許され、土佐藩の海援隊長となり、銃器などを満載して長崎を出帆したのが4月19日。だが紀州藩の

明光丸と衝突し、船は沈没する。蝦夷地行きは計画倒れになる。

望月亀弥太の死で蝦夷地行き中止

実は龍馬が蝦夷地を目指そうとしてのはこれが初めてではない。元治元年6月初め、神戸から黒龍丸に京摂の浪人約50人を乗せて出帆、江戸に着くが、航海中の6月5日、京都で池田屋の変が起こり、志士ら9人が闘死。その中に龍馬の同士で勝塾の塾生の望月亀弥太が含まれていた。江戸で海舟に会った龍馬は、海舟に難儀がかかると判断し、蝦夷地行きを断念したのである。

さて、いろは丸を失った龍馬は薩摩藩の保証で大極丸を購入するが、たまたま長崎でイギリスのイカルス号の水兵2人が殺害され、犯人が大極丸に逃げ込み、海援隊に嫌疑がかかる。龍馬は憤懣やるかたなく11月10日、京都の近江屋から備後広島藩の林謙三に次のような便りを書いた。

されば此大極丸の一条ヘチャモクレ、御一身おもしろくなしとくれバ、海援隊の名ハ身をよする所なれば、持ておろがよろし、それとも幕へでも、薩へでも…。

なおも気がおさまらない龍馬は翌日、再び林に「やがて方向を定め、シユラカ極楽かに御供可申奉存候」と便りを書いた。死の4日前だ。

龍馬の死と北海道開拓

龍馬の信念を継承したのが坂本本家を継いだ坂本緒直寛である。直寛は自由民権の士として三白運動にも加わり、龍馬の死から30年後、農民会社北光社の農民112戸を率いて北海道クネップ原野に入植した。現在の北見市である。直寛が発起人の片岡健吉に出した便りに、こう記されている。

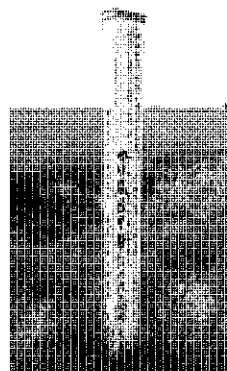
将来日本社会に一つの潔き義に生きる神の国を作り度く候。

龍馬の思いは直寛によって引き継がれ、そして直寛の精神はやがて孫の直行へと受け継がれていったのを実感する。

毎月1回出演しているNHK札幌放送局のテレビ「ふるさと人間発見」に、坂本直行を取り上げることになり、先日、取材で広尾の開拓地を訪れて、直行さんが詠んだ一句が書かれているのを見た。

つり風呂や 舟にゆられる心地して
直行

直行さんの「いごっそう」ぶりが目に浮かんだ。私の龍馬研究はまだまだ道半ばである。



坂本直行さんが入植した広尾の開拓地跡。標識の背後に一句が見える。

第2回「高知県立坂本龍馬 記念館・現代龍馬学会」開く

テーマは“飛躍・龍馬スピリッツ”

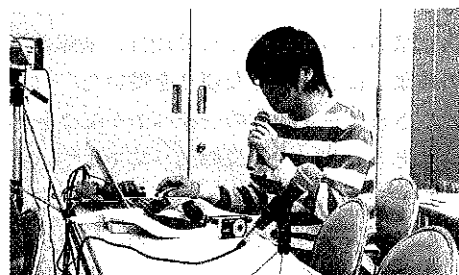


「第2回現代龍馬学会」=永国淳哉会長=は5月22日、高知市浦戸、国民宿舎「桂浜荘」の大会議室で開かれた。今回のテーマは「飛躍・龍馬スピリッツ」。混迷を深めている現代世相がまさに“平成の龍馬”登場を求めている折だけに会は熱気のこもった一日となった。この様子はまた、全国の龍馬ファン向けにインターネット中継もされた。

午前9時からの総会では、県文化財団、島田京子理事長、永国会長の挨拶に続いて初年度の事業報告を行った。会員は107人に、紀要第1号の発行、高知大学での「もうちょっと龍馬を知ろう」講座(6回)。記念館の機関紙「飛騰」へ現代龍馬学会用に2ページの増ページなど着実に活動の範囲を広げてきた。

実習航海もバックアップ

来年は龍馬記念館の開館20年という大事な節目の年に当たる。現代龍馬学会としてけじめの年をどう係わりあっていくかを中心に、更なる会員の確保を目指すことを申し合わせた。館の3年企画「風になった龍馬」展の今年は第2回目に当たる。その関連イベント、県の海洋実習船「土佐海援丸」を使った高校生の実習体験航海(6月、7月)「我ら海援隊!」の中で一部講義を受け持つことになっている。また、来年1月1日を目指して紀要第2号の発行を進める。さらに、現代龍馬学会研究発表を、「海の見える・ぎやらい」で開催することなども決めた。



インターネット中継をする吉岡 慎作氏

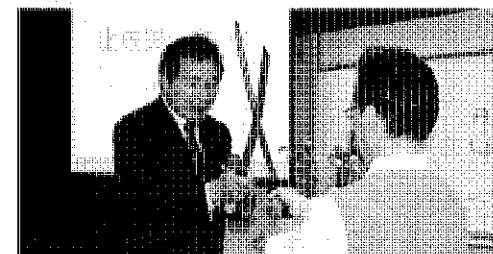
宣言

坂本龍馬の思想と行動に学び、現代を見つめなおそうとして、昨年4月に発足した高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会。県内外から会員も107名に増え、順調な足どりを刻んでいる。一年を経て、ことしは、「飛躍・龍馬スピリッツ」を総合テーマに、一般の人たちを含めて89名が学習。熱い討論をかわした。NHKの大河ドラマ「龍馬伝」で、龍馬と高知への関心も飛躍的に高まっている。

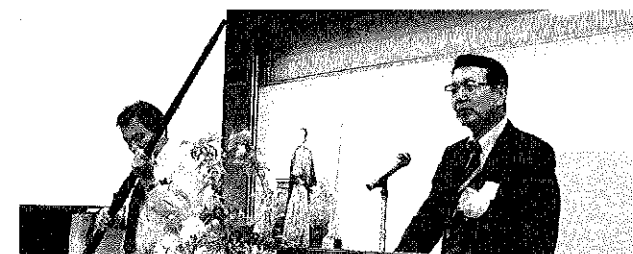
私たちは今後、互いに協力し合ってこの学会を発展させるとともに、龍馬研究のさらなる充実、龍馬の実践。に一層力を入れていきたい。

平成22年5月22日

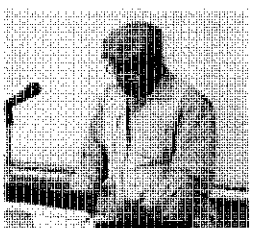
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会



公文 久雄氏



小島 一男氏



春野 公麻呂氏



鈴木 典子氏



大倉美知子氏



坂本世津夫氏



小美濃清明氏

固唾をのんで!

7人の発表者個性豊かに 時間忘れた研究発表

総会の終了を待ちかねて、研究発表会に入った。7人の発表者は準備万端。わずか30分の持ち時間にそれぞれのパフォーマンスがあった。現物の資料を持ち込んだ方、パワーポイントフル活用、一方語りだけの方も独自のスタイルが参加者をひきつけ最後まで熱く、何よりさわやかであった。

夕方からは懇親会である。一般参加の方も加わって昼間の論議の続きと新しい出会いの場が広がった。アトラクションに詩吟が、日本舞踊が「龍馬の独り言」の朗読などあって盛り上がり来年の再会を約した。

研究発表7態

★トップバッターに立った公文 久雄氏(土佐歴史資料研究会副会長)は「土佐鐐」についての話。鐐の用途、目的、変遷を模造刀などを使って実演も交えて発表した。「人前で話すはにがてぜよ」と言いつつ額の汗を拭きの講義であった。

★春野 公麻呂氏(郷土ガイド書専門、文筆家)のテーマは「龍馬が開眼した旅路～四国龍馬街道～」。自らの足で「踏査」と言う春野さんの研究には毎回驚かされる。「伝承が伝わるには根拠があるはず」が対象に向かう春野氏の基本姿勢。存分にそれを発揮した。

★鈴木 典子さん(池 道之助5代目)は、ずばり「池 道之助旅日記を読んで」。ジョン万次郎が出てきます。万次郎にオルゴールを見せてもらって驚く道之助、上海旅行、長崎での外国人との交流の様子などが目につくと浮かんでくる現代語訳での日記朗読だった。

★元航空工場整備士という異色の肩書きを持つ小島 一男氏(土佐歴史資料研究会理事)の「幕末土佐における銃砲の変遷」発表には、火縄銃から元込め銃まで自慢の逸品が勢ぞろい。流暢な説明が現物に触れるタッチで厚みを増した。皆さんその重量も実感した。

★「龍馬のセンス」にカラーで迫ったのがカラリストでカラーオフィスPERSONAL代表、大倉美知子さん。日本固有の美意識「はかし」とは正反対の西洋の「美は両極端にあり」の美意識を龍馬のカラーセンスに感じると妻お龍に贈った「帯締め」から考察した。

★坂本世津夫氏(高知大学国際・地域連携センター教授)のテーマは「明智光秀と龍馬」。坂本龍馬と同じ坂本の坂本世津夫が語るところに妙に説得力がある。それに講義慣れているからよどみない。長宗我部、明智光秀、岡豊城、才谷、紀要2の完成が楽しみ。

★最後は歴史研究家の小美濃清明氏の「坂本龍馬と竹島開拓」。龍馬伝絡みでお忙しい小美濃氏だが、そこは手馴れたもの。龍馬がなぜ竹島を目指したのか、また龍馬が果たせなかった竹島行きを果たした岩崎弥太郎。その日記に秘められた謎など興味深く話した。

大会を終えて

時間不足の中で

2年目の余裕のはずが当てが外れた。「龍馬伝」余波でとにかく時間が足らなかった。看板、チラシ類など制作は前日の夜遅くまで続いた。その苦労のかいあって大会は問題なく終わった。研究発表も「それぞれ個性があって楽しかった」と好評であった。そして夜の懇親会は、会員以外の方も参加して盛り上がった。詩吟、日本舞踊、そして持ち込み「軍鶏鍋」「イタドリ料理」すべてボランティア。さすが龍馬学会の面目躍如であった。大いに龍馬論議に花が咲き、来年の再会を約してお別れした。

皆さん本当にありがとうございました。(森 健志郎)

やっと一年

創設から1年。2年目の「定期総会大会」を迎えました。参加者は89名でした。一般参加者43名。会員出席者は46名。その内9名が県外からの出席でした。東京、さいたま、大阪、兵庫、広島、松山、徳島、福岡などからです。

県内と県外で名札の色を変えたので、気づかれた方も多かったと思います。月例会には来られなくても、年に一度の総会大会ならでのこと。もちろん懇親会にも県外会員の皆様は100%の出席率でした。熱い思いを共有することも発信の源ではないでしょうか。

また、毎月の例会に来られたことがない方も、まずは気軽に参加し楽しんでほしいと思います。(曾我千寿子)

「ぼれ話」

犬歩棒当記(二)

洋書の謎—おりようの挿絵—

京都国立博物館 宮川 禎二

坂崎紫瀾の「汗血千里の駒」は龍馬小説の嚆矢である。明治十六年に土陽新聞に連載されたこの小説は事実と創作をとり混ぜた読み物であり、筆者はこれまで読まずに来た(すみません)。しかし昨年、岩波書店の『新日本古典文学大系明治編十六』に納められた土陽新聞版を読んで本当に目から鱗が落ちたのだ。内容の重要性もさることながら新聞連載時に描かれた挿絵がとても貴重だ。

興味深い多くの絵の中に龍馬の妻おりようを描いた挿絵がある。別名「鞍子」の画像だ。明治初年に高知へやってきたおりようの姿を鮮明に記憶する土佐の人々がいて、十五年後に彼女の印象を挿絵画家の藤原信一に語って描かせたものだ。

高知城の天守閣を背景にロンドン製(傘骨の中心部にそう記される)のパラソルをさし、坂本家の家紋入の着物に袴姿、袴の紐にはピストルを挿して、左手には洋書を抱えたとても奇抜な姿なのだ。見返り美人の構図である。

単なる「絵」ではないことはその髪形から分かる。慶応三年十一月、下関で龍馬の死を聞いたおりようは悲しみのあまりその髪を自分で



龍馬未亡人「鞍子」の挿絵
(「汗血千里の駒」第63回下)

切った。しかしこの挿絵ではその事情を知らないままに短髪で表現されたのだ。この絵の信憑性の高さを示している。明治十六年ならば、おりようを記憶する読者も高知にはいたはずだ。デタラメには描けない。

パラソルは坂本家に残されたものなのか？ 着物に袴姿とは当時どう思われたのか？ ピストルを腰に挿して道を往来しても良かったのか？ 何故左手に読めないだらう洋書を抱えているのか？ などなど考えるべき点のとても多い画像だ。

龍馬は慶応三年六月二十四日付の姉乙女あての手紙のなかで「妻には(ひまな時は本を読め)」と言いつけています」と書いている。龍馬の言葉がこちらの左手の「洋書」に反映されているのだろうか。いや、もつと深い意味があるのかもしれない。

坂崎紫瀾も「見る者皆奇異の想いをなしたり」と記している。おりようがいかに変わった女性だったのか、この挿絵が雄弁に物語っている。

コラム・龍馬のこと

龍馬、万次郎そして弥太郎像に思う

北岡 顕史

桂浜の坂本龍馬像は入交好保氏が中心になって建立されたことはあまりにも有名である。

一方、足摺岬の中浜万次郎像は、当初、吉田茂元総理を委員長とする建設委員会が組織されたが、なかなか円滑には進捗していなかった。そこで、この建設委員会の委員であった私は同窓友人で地元中浜出身の広田勝氏(現土佐清水市商工会議所会頭)に協力を要請し、広田氏を理事長とする中浜万次郎銅像建設青年会議を組織し、わたしは事務局長として実務に当たることになった。早速、広田氏が秘書を務めていた参議院議員・八田一朗氏の人脈をふる活用して、三菱系各社や新日鉄系各社などの協賛を得て、銅像建設起工式の宇宙中継(足摺、東京、ハワイ、フェアヘブン)や、日本テレビによるテレビドラマの制作・放映もいった。また、私はかつての同窓先輩、入交好保氏に龍馬像建立の苦労話を伺ったことがある。その際、「龍馬と万次郎では歴史的な評価が違う」と、一笑されたものであった。だが、龍馬は河田小龍を介したとはいえ、万次郎の海外体験を修得している。その中から、船、商売することなどの大切さを学び、後の亀山社中や海援隊に結びついていったのではないだろうか。

また、三菱グループは万次郎が、開成学校(現、東京大学)の教授として弥太郎を教えたいきさつもあり、万次郎像の建立に当たっては一千五百万円、そして弥太郎像には一千万円のそれぞれ寄付をされていると聞いている。

現在、大河ドラマでは龍馬、万次郎、弥太郎が話題になっている。これからストーリーは佳境に向かう。ただ、私は万次郎像建立に携わった一人として、万次郎には愛着が深い。昨年の現代龍馬学会のシンポジウムに、万次郎像落成式に出席されたご子孫の中浜京さんの姿があった。感無量であった。

会員便り

領石に残る「天晴の石灯籠」

唐岩 淳子

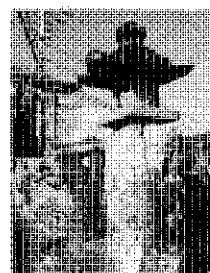
南国市領石には「天満宮」と呼ばれ、菅原道真を祀る古い神社がある。その鳥居近くに石灯籠が一基建てられている。高さは2メートルほど、竿は大きな自然石で作られているが、長い年月により一部は欠け落ち、「天晴元 丁卯 十月吉日」と彫られた文字がかわらうじて読み取れる。

「天晴」という年号は存在しない。丁卯とは、幕末最後の年、慶応3年(1867)のことである。この年坂本龍馬が中岡慎太郎とともに近江屋で暗殺された。そして翌慶応4年9月に明治と改元されている。

朝廷の定めたものでない年号は「私年号」といわれ、全国に多数存在するが、「天晴」という年号が使われているのは、土佐に限られている。広谷喜十郎氏によると、この年号が最初に注目されたのは、安芸市土居春日神社の石灯籠である。

北山道の要衝だった領石送り番所や大塚御殿について調べているうちに、偶然この貴重な石灯籠に気づいた。地元では全く忘れられていた。「土佐史談206号」に門脇良雄氏が紹介し、2006年「街道の日本47 土佐と南海道」の中にも記述されている。「天晴の石灯籠」で、現在確認されているものは、領石と、安芸市の春日神社の他に、安田町神峯神社、吾川郡仁淀町黒森山鈴ヶ峠の4カ所である。昨年度の全国歴史フォーラムで優秀賞を受けた、高知東高校3年生の片岡さんが、「私年号天晴を検証」という論文の中で、高知市春野御山所宮の狛犬、香南市赤岡須留田八幡宮の絵馬、高知市春野森神社の手水鉢(天政)など10例を報告している。

慶応3年10月、領石の住民がこの「天晴」という年号を刻んだいきさつについては一説がある。「国内不穏につき改元する」という噂があり、土佐の人たちは「来年は天晴という年号に変わる」と信じたに違いない。どのような気持ちで翌年の明治元年を迎えたであろうか。この石灯籠も、風化が進んでいる。「天晴」の文字は今にも欠けてなくなりそうである。保存の方法についてどうかご存じありませんか？



高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015 <http://ryoma-kinenkan.jp>